

きます。

【執筆者の紹介】

大正十二年二月二十七日、岐阜県瑞浪市の今井学、春子さんの長男として生まれる。

昭和十七年三月、岐阜県立恵南中学校を卒業される。
昭和十九年一月、現役兵として中部第二十三部隊に入営。

昭和十九年二月、満州国三江省勃利の独立戦車、第一旅団整備隊に転出。

昭和二十年一月、寧安独立歩兵第五八二部隊に転属。
昭和二十年八月、安東第三七八一五部隊に転属、十五日終戦、時に陸軍軍曹であった。

昭和二十年九月、奉天市北陵にて作業大隊を編成し黒河を経由して入ソ。

以後西シベリアにて抑留生活を送られる。主としての作業は伐採、炭坑作業に明け暮れる毎日が続いた。

そこは北緯五十度のヤンスク山脈の山中であったのである。

昭和二十二年五月十七日、ナホトカを出港、二十一日、舞鶴に上陸復員される。

復員後、新教員の講習を受け、教員生活に入られる。その間、土岐中学校、釜戸小・中学校、瑞浪小、駄知小、陶小、笠原小学校等を歴任され、昭和五十七年三月、三十四年間の教員生活を終えて、定年退職される。

彼の教え子、その数、千名を超え、多くの人々に慕われておられる。

現在、全抑協の瑞浪支部の役員として活動中で、大切な会員のひとりである。

(岐阜県 鈴木 善三)

二等兵悲話

高知県 岡本 陸

昭和二十一年元旦

それは昭和二十一年元旦の出来事だった。前夜は衝

撃的事件があったし、それに入ソ以来四十余日間の積

もる空腹と寒さで殆ど一睡もできず、元日を迎えると云うのにこのまま死んでしまうのではないかと観念していた。その矢先、多分午前六時頃だったと思うが、

テントの外から入って来た大隊長の当番兵が、寒さに震えている私に向かい、すぐ大隊長の部屋に来るようにと伝えた。北緯五十二度の地では冬至から正月にかけての時期には夜明けは確か午前十時で、日の暮れるのは午後三時だったと記憶する。だからその時は正に真夜中みたいなものだったわけだ。この真夜中に何ごとがあつて突然に大隊長からの呼び出しが不可解だったが、命令というので致しかたなく、それこそ重い重い足を引きずってテントを出た。その頃私達は防寒帽は被ったまま、防寒靴は履いたまま、防寒手袋ははめたまま、ありとあらゆる防寒具を身に着けたまま、零下五十度の寒さの中で伐採作業をする時と全く同じ格好で、床に横たわって寝たら寒さが床の下から全身に伝わって来るので、床に腰を下ろしたままの姿勢で寒いテントの夜を過ごしていた。だから呼び出しがあつ

てすぐにテントを出た。

（私は北緯五十二度と知ったかぶったことを言つたが、その頃私たちは今自分は一体地球の上のどこにいるのか皆目見当がつかなかった。北緯五十二度ということは九一年夏、私が嘗て収容されていたこの地の収容所に戦友の慰霊の訪問を果たした時初めて知った）

実は昨夜、突然ソ連側は捕虜全員を収容所の広場に集め、五時間以上の時間をかけ、収容所長以下全職員総動員で我々捕虜の人員点検をした。極北の地では午後三時を過ぎると暮れ始める。それを午後四時つまり暗闇の中で始めて午後九時まで零下五十度の雪の中に立たされることは、それはもう死ぬ程の苦痛で、事実、この間何人かが雪の上に倒れた。そしてこの点検で捕虜の人員不足が分かった。つまり逃亡兵があつたのだ。

「逃亡」、この零下数十度の雪に覆われた人跡未踏の大原始林でそれを決行するのは、恰も秒速六十メートルの台風の吹き荒れる太平洋のド真中で生きようとして船から海の中に飛び込むような無謀で、愚かなことだと知り乍ら、入ソ以来四十余日、この日までにも

う数え切れないほど多くの同僚が死んでいったし、何時その番が自分の身に回ってくるか分からないような状態では、そうと知りながらも逃亡をやってみようかと誰もが心の中で密かに思っていた矢先、とうとう誰かが決行したのだな、とみんな思った。それはとても成功する筈は無いが、この勇気は称えるべきだと、不安の中にも彼ら逃亡者に同情さえ寄せた。その夜は飢えと寒さの外に逃亡者のことが氣に掛かって誰もが益々眠られぬ夜となった。

その矢先突然の大隊長の呼び出し、私が彼の部屋に行くと、他のテントからも八人の兵が同じように呼び出されて集まっていた。完全武装したソ連兵が四人、私達九名を連れて外に出た。名物の吹雪こそなかったが格別に厳しい寒気だった。疲労しきった私達の遅い足取りに怒ったソ連兵は後ろから銃を突きつけ、時には威嚇の実弾を発砲して「ダバイ・ダバイ」（速く歩け）と脅かした。

私は、どうもこれは私たちを密林の中に連れ込んで射殺するのではないかと思った。日本兵は後から後か

ら死ぬ、それに大した仕事もしないし、その上今度は逃亡を企てる、面倒だからみんな殺してしまえ、それに今日は昭和二十一年一月一日という節目、小手調べに二等兵から始めるのか、とそんな極端なことさえ連想した。

二キロ程雪の道路を歩いてから約三十メートル密林の中に入ったところに、シベリア松の大木の根元の雪を鮮血に染めて三つの日本兵の遺体が横たわっているのが、微かな雪明かりの中に確認された。私はこの時始めて此処に連れてこられたのはこの遺体の運搬のためで、射殺されるのではなかった事を知った。

昨夜人員点呼で判明した逃亡者は、あの時から僅か一、二時間の後に射殺されてしまったであろう。彼らは僅かに二キロ足らずを逃亡したものの、飢えと寒さに動けなくなつて大木の下で焚き火を取っていたところを追っ手に発見されて射殺されたものだろう。私たちは固く凍結しだしたその三つの遺体の首にロープを巻付け、三人で一つ宛遺体を引っ張った。私はその時死んだ者への同情の念を持つには持ったが、それより

も「荷」があまりにも重くて難儀がいくので、恥ずかしながら「腹がへってたまらない、何か食いたい」と云った動物的欲望が脳裏を去来していた。私はこれが誰の遺体か知らなかったし、また早くそれを知りたいといった関心も無かった。収容所に帰り着いて遺体を衛兵所の前の広場に放置した。その時漸く夜が明け始めた。

その夜、元旦と云うのにこの日も平常並に作業が強要されたのだが、一日の作業が済んでから大隊長は全員を広場に集めて事の経緯を説明し、不祥事の再発無きよう注意を喚起したが、この時私は初めてこの中の一人が無二の戦友正岡であることを知らされ呆然とした。私は解散後彼の死体の遺棄場所に行つて、無造作に放置された三つの遺体を一か所に集め仰向けに直して頭を並べて整頓してやった。そして正岡の冥福を祈つた。ソ連側はその遺体を何日間もそのまま放置した。「逃亡したらこんな運命になるぞ」と云うみせしめの為だったろうが、皆作業の行き帰りに必ずこの場所を通るのだが誰も遺体を見向きもせず、全くの無関

心振りだった。そんな事より腹の中に何か足しになるものを入れることだけしか考えなかった。餓鬼道が私たちを完全に支配していたのだ。

その前夜

私のテントでの寝る場所は一番入口に近いところで、誰もが皆体が冷えて小便のためひっきりなしに出入りするのだが、その都度零下五十度の寒気がモロに吹き込む。捕虜になったら何も旧軍隊の奴隸的階級制を撤廃したらよさそうなものだと思ふのだが、当時は未だ頑に改めず、結局二等兵だけは日ソ双方からいじめられた。どうしてもその寝場所を考えてくれない。これは私のテントだけでは無く、正岡のテントでもまた同様だったらしく、彼は毎晩のように私のテントに来て二人でお互いの苦痛と愚痴を話し合ったものだ。

忘れもしない昭和二十年十二月三十日夜、例のように彼は私をテントに尋ねて来たが「このままでは俺達二人とも死んでしまふだろう。俺かお前かのどっちかが生きて帰れたら良いが、そんなうまい具合にはいきまい。若し一方だけが無事帰れたら、お互いの家族に

知らせ合うことにしようぜ」と言つて、私たちは互いの故郷の住所を確認し合つた。

私と正岡はその年五月ハイラルの部隊入隊以来の戦友で、他の三十余名の戦友は全部離散してしまつたのに、不思議と二人はこの極北の地で行を共にして来た。しかも牡丹江で乗つた貨物列車がウオロシロフ駅で北に向きシベリア行きが決定的になつた時、とても生きては帰れまいということでお互いの故郷を話しあつたのだが、偶然同郷だつたことを知つた。二人はその夜再びそれを確認し合つた。

正岡はまだ多くを語りたいようだったが、ちょうど夜の点呼の時間が来たので残念そうに自分のテントに帰つて行つた。が最後に彼は「俺は女房子供も死んでしまつたかも知れない、それに俺も死んだら一家全滅だ。お前の家族はきつときつと生きて祖国に帰つているだろう。お前は何とか生きて帰れよ」と言つて別れた。それが最後だつた。翌日彼は仲間と一緒に逃亡を執行した。だからその夜私に最後の別れに来てくれたのだつた。

正岡は開拓団で馬を扱い慣れていたので、收容所に来てからも一般の捕虜とは違つて馬ざりで炊事用の水や薪の運搬などの作業を担当していた。逃亡した他の二人も同じ仕事の相棒同士だつた。三人で謀つての決行だつた。既に馬だけが飼いはとれられずに暴れていたのが事件発覚の端緒となつたらしい。

死の行軍

昭和二十年の五月、いわゆる最終的根こそぎ動員で、私は新京（長春）から、正岡は北滿の開拓団から最果ての西北ソ満国境ハイラルの部隊に入隊した。日本一の機械化部隊と「豪語」していたが、十五センチ砲を牽引車で引つ張るだけのもので、その数も僅か三基だけ、それも売れ残つたような老兵には満足な操作は危ぶまれ、その教育もろくにしないまま、六月には対ソ戦に備え興安嶺の山中深く新陣地構築に入つた。今に及んでこの挙は盗人を捕まえてから慌てて縄をなうようなもの、二等兵の目にも愚拳と映つたし、敗戦の色濃いことを直視した。

果せる哉、八月九日突如築城の現場を放棄して撤退、

山麓で貨物列車に乗り、同二十日頃ハルビン到着。この間約十日、ソ連機の爆撃も無く無事平穩、但し沿線一帯人影全く無く不気味な雰囲気包まれていた。ソ連参戦と日本降伏は、ハルビン到着後ソ連軍による武装解除に逢って初めて知る。

次の日、ハルビン郊外の軍糧秣庫で「帰国用」の食糧衣服等を各人の欲しいだけ持ち出した。有るところには有るものだ、米、砂糖、菓子、酒、純毛純綿のシャツ、各種軍衣、靴、それこそ大デパート並で何でもが山積していた。長年耐乏生活に苦しんで来た私達は手当たり次第に欲しいものを漁り、殆どの者が五、六十キロもの荷に纏めた。それを負って「ダモイトウキョウだ」とソ連兵にだまされ、八月の炎天下を東に向かつて「敗戦の行軍」を始めた。

それは正に「死の行軍」だった。隊伍の前後周囲を完全武装のソ連兵が厳重に見張り、万一隊伍から脱落する者があったら直ちに銃を向けた。夜が明けると行軍を始め、日が暮れたらその場で露營した。だから或る時は道路端で、或る時は高粱畑で、或る時は草原で、

泥水をすすり半煮えの飯を食い、重い荷が背中に食い込むのをじっと堪えての日々の行軍だった。その私たちの隊列は日毎に人員が増え、何千人もの集団になつて何キロもの行列と化した。

確かハルピンを発つて三日目頃からだつたが、異様な光景が現出した。それは背に乳呑児を負い幼児の手を引いた一見して開拓団のお母さん方と分かる女性達が、毎日のように五組十組と私たちの行列に加わってくる。

この方達は恐らくは夫は軍隊に招集され、女手一つで開拓の仕事と一家を守っていたのだらうが、ソ連の参戦で追われ、北滿の大平原を野に伏し川を渡り西に東に逃亡を続け、或るときは食に窮し、或るときは原住民からの積もる恨みの反撃を受け、幾度か死線を越えて何百里を踏破し漸くにして鉄道沿線の地まで辿りついたものでろう。そして疲れ切った彼女らは「敗残の兵」とはいえ偶然に日本軍の姿を見いだして欣喜雀躍した。何故ならば、「天に代わりて不義を撃つ」日本軍は、神様仏様に次ぐ強くて正義の軍隊であつて、自

分たちのこの苦難を見たら必ず救いの手を差し伸べてくれるだろうと信頼を寄せていたからだ。

だが、敗残の日本軍將兵は今や完全にその威信も名誉も捨てて烏合の衆と化し、この哀れな母子に一片の同情を寄せるものも無かった。

ところがただ一人正岡だけはそうではなかった。彼はそうした母子を見る度に軍衣のポケットから、ハルピンの糧秣倉庫から持ってきたキャラメルや氷砂糖を取り出して幼な児達にやり、そして母親を激励した。とかく隊伍から遅れがちな正岡をその都度ソ連兵と小隊長が「やめろ」と怒鳴ったが、彼はそれを無視して続けた。

昼の炎熱はどこへやら、露営の夜は夜露に軍衣が濡れて一段と冷え込んで寝られない。隣に寝る正岡がこう言った。「あのかわいそうな母子の姿は俺の女房子供の姿だ。他人事では無い」と泣き声で言った。そう言いながら彼は起き上がって、枕にしていた背嚢を解いて中から金平糖やキャラメルを取り出して軍衣のポケットに入れかえた。明日また遭うだろう子供達のため。

めに。

彼は牡丹江に着くまでの約二十日間もこれ続けた。四、五日もしたら彼の残りの品は少なくなつたが、実は私も彼同様新京に妻子を残してきたのだが、恥ずかしながら自分の背嚢から正岡に分けてやるべきだと思いがらどうしてもその決断がつかなかった。甘味品が品切れになると今度はメンポウを少しづつ子供達に遣つた。だが、私を含めて、正岡の真似の出来るものは一人とて無かった。それが敗戦がもたらした旧日本軍將兵のなれの果ての姿だった。この時私たちの隊伍に加わった母子は、言うまでもなく弱い婦女子の身、すぐ落伍していったが、恐らくは祖国に帰り着いた人は稀で殆どが異境の地に散つたであらうし、幸い生き残った人も、いわゆる残留日本人孤児となって不幸な運命を辿つたことだろう。

私は思いもよらぬ正岡の崇高な大慈悲の行為に心打たれた。がどうしても彼を真似ることは出来なかった。それでせめて何か彼の役に立たなければと何時も思いつながら、あの極限の状態では自分自身の命を守るだ

けが精一杯で、何一つ彼のために役立つようなことは出来なかった。

彼のこの悲惨な最期は私にとっても堪えられないような悲しみだったが、私はこの時「俺はどんな苦痛にも堪えて生き抜いて帰国を果たし、彼の悲壮な最期を御遺族にお伝えしなければならぬ」と決心した。

私は正岡が死を選んだのは「ソ連の虐待に堪えかねてその苦しみから逃避しようとしたこともあっただろうが、それだけでは無く、捕虜という逆境にあってもなお古い陳腐な規律を改めず、二等兵をいじめる旧態依然とした軍隊の体制に対し抗議の死だった」と思い、それは弾丸雨飛をも恐れず敵前上陸して壮烈な戦死を遂げたような悲壮な勇氣ある行為だったとさえ思った。

悲願成就

四年間の苦難に堪え、私は二十四年八月復員した。何はさて置いて、正岡の遺族を探してあの勇敢で悲惨だった彼の最期を報告するのが私の第一に取り組むべき仕事と考えていた。幸いあの時新京に居残った私の妻子は無事帰国を果たしていたが、戦後の混乱と苦難で、

我が家の生活を立てることが何よりも先決だったし、もう一つ困ったことは、実は私は本来長野県の生まれで、昭和十八年新京で結婚して妻の籍に入った。が、結婚後高知県に帰ったことがなかったので、高知県内のことは西も東も分からなかったし、そんな訳であの時正岡が言った彼の出身の村の名前も記憶が薄れていた。けれどいろいろ苦心の結果漸く彼の出身地を突きとめることが出来た。だが残念ながら彼の遺族は行方不明で、また親戚も身近な人も何も無い不幸な境遇だったことが分かった。それが確か昭和三十年の春頃だった。私は本当に失望して落胆した。死の前夜わざわざ私を訪ねてきて寒い寒いテントの中で震えながら固く約束したのに、それが果たせないことは、たとえどの様な事情があろうとも御遺族にもまた彼の霊に対しても誠に以て申し訳なく、いたくその責任を痛感していた。けれど諦めはしなかった。

ところが昭和四十八年夏のこと、高知県世話課から突然の電話があった。それは『正岡の遺児が世話課に来ることになっている』とその日時を知らせてくれた。

もうあれから四半世紀以上も経ってとかく忘れ勝ちになつていた彼のことを彷彿として思い出され、私は忘れかけた彼の殉難の経緯とあの時の模様を頭の中に整理して、指定の日時に世話課に行った。

遺児とその一人娘、つまり正岡の孫にあるわけだが、二人が私の到着を待っていた。

彼らは父の死は勿論知つてはいたが、その経緯については何も知らなかった。私は彼の死の模様について真実を話すことはなるべく控え、ともにハイラルの部隊に入隊してからシベリアでの死に至るまで私といつとも一緒に、特にハルビンから牡丹江への敗戦の行軍中、避難する日本人開拓民の哀れな母子をいたわったこと、いつも最期の最期まで妻子のことを心配していたことなどを話し、彼こそ日本一立派な父親であり真の日本軍人だったことを、不自由な中国語を思い出しながら精いっぱい努力をして語った。

二人に私の意が通じたらしく、ジーと聴いていたがやがて立ち上がって『謝々』と言って深く頭を下げた。私はこれで二十八年振りに悲願が漸く達成できたと思

い、肩の荷が下りた思いがした。

ここで私はちょっとお二人を紹介しておこう。遺児のお名前は失礼ながらどうしても思い出せないが、一方孫娘は十四、五歳で中学生、バスケットボールの選手のようにスラリとした百七十センチ以上もありそうな、それはそれは美しい少女だった。

私が二人に「どう、このまま日本に住むようにしたら。お母さんも日本に呼び寄せたら」と勧めると彼は「私は気管有病（胸が悪いの意）だからこのまま気候の良い父の国に住みたいのだが、この娘がどうしても中国に帰りたいと言うし、それに妻を呼び寄せることも難しかろう。だから仕方がない、日本にとどまるのは諦める」と言ったが、限らない未練がある表情だった。幼少の頃親と離れて苦しくも悲しかった自分の体験を娘には味あわせたくないと言うのが本音だっただろう。中国残留日本人孤児の肉親探しが本格化したのは確か昭和五十六年のこと、今だったら孤児の祖国訪問はマスコミが争って大きく取り上げて報道するが、当時はその地方の新聞すら全然記事として扱わなかっ

た。そして今だったら孤児達の誰もが故国永住を熱望するのが常だが、この美しい少女はそれを望まなかった。

その日は後日の再会を約してそれで別れたが、数日してまた県の世話課から何月何日高知駅発の列車で帰国するという電話を頂いた。

私は高知駅に二人を見送った。県の係が付き添って、大阪からは空路北京に直行するという。私のほか誰も見送る人もない寂しい出発だった。私は土佐山田駅まで二人と同乗した。汽車の中で私は何か記念にと思って準備していた何がお金と、そして少女にはサングラスのアクセサリを贈った。二人とも車中で早速包みを開けて見て、とても喜んでくれた。特に少女はそれを胸に抱いたり眺めたりして大変な喜びようだった。私も嬉しかった。彼は「実の親に逢ったような嬉しい故国訪問だった」と言い、土佐山田駅で別れる時「妻や娘を説得して何時の日か祖国永住が実現するようにしたい。その時の再会を楽しみにしています」と言ってお別れていった。

手紙

彼を送って二か月ほどして彼からの手紙が届いた。それは中国語と日本語のチャンポンのものだったが、意は十分に通じ理解出来た。要するに無事帰国したという知らせとその節の謝礼だった。少女の手紙も同封してあったが、それは失礼だがお父さんのものよりはもっと上手な筆跡だったがこの方は全部中国語だった。私も返事を書いた。

そして約三年の間に五、六回の交信をしたが、いつとはなしにそれが途絶えた。私は彼の胸の病が治らずまさかのことがあったのではないかと心配していた。実は彼の本籍地の戸籍には登録されていたので、私も全抑協に関係を持っていたから、彼の本籍地の全抑協支部長を通じて調べて貰ったところ、矢張り私の予感通り亡き人となっていた。哀れ正岡一家の終焉だった。だが、私は遺児達に逢いそしてかれらに父の最期を語り告げることが出来て、これがせめてもの正岡への供養となったものと思っている。

【執筆者の紹介】

岡本陸氏は、終戦直後からシベリアに抑留された昭和二十四年八月までの四年間、厳しいシベリアの環境下で、齒を食いしばって苦難に堪えられた。特に入ソ当初は、北緯五十二度、バーム鉄道建設工事現場の最西北端エボロン湖畔に近い収容所に在った。厳寒時の寒さは零下六十度に達し、その余りの寒さと飢えと強制労働で犠牲者は相次いだというが、そのような惨たる状況にありながら、氏は内心「絶対死なない、生きぬく」と常に強い意志を持ち続けたという。その意志はどこから来たものだろうか。

氏は昭和十年渡満、満州国協和会に入り、「満州」建国運動に携わったが、この間特に昭和十三年から同十五年に及ぶ約三年間、東辺道（通化省）で従軍宣撫班長として日本軍に従軍し、当時この地一帯で猛威をふるっていたゲリラ掃討作戦に参加したのが、生涯忘れられない貴重な体験だったと云う。楊靖宇氏を領袖とする抗日連合軍は、長白山麓の密林の天険に拠って執のような抵抗を続けたが、それはこの付近一帯が世界的

に優れた鉄と石炭を無尽蔵に埋蔵し、当時の日本の世界戦略上この戦争資源の早期開発が必要不可欠だっただろうが、その開発を阻止妨害するのがゲリラの最大の狙いだったと云う。従ってその抵抗は執よう果敢且つ長期に渡り、ために日本軍や討伐隊の苦難は激しく、犠牲者は続出したらしい。抑々その討伐行動は主として十月から翌年の三月までの厳寒期に展開され、この間東辺道一帯は常時零下三十度以下となる。この寒さの中、ゲリラを追って密林の中を、連続十日間も二十日間も雪の中に露営しながら転戦することは、ゲリラとの交戦の有無にかかわらずそれ自体想像に絶する苦難だった、と氏は言う。

だが氏は言う、討伐隊の苦勞もさること乍ら、追われるゲリラの苦難は更にひどかった筈だ。飛行機や無電等当時の新鋭武器を動員し何万何千の大軍でも水も漏らさぬ大包围作戦を巧みに潜り抜け、困苦欠乏に堪えてゲリラ活動を続けたのは正に超人的な信念だった。そしてそれは武装された強烈な民族意識と体力と、それに表面日本軍に従順を装いながら裏面でゲリラを支

援する民衆の背後からの協力があつたからだ、と氏は言う。

その氏自身とゲリラ戦士の体験から、勿論シベリアの寒さだけは東辺道の比ではないが、衣、食、住ともに従軍の苦に比し堪え得るものと自ら言い聞かせていた、と云う。それが「生き抜く」原動力となつたのではないかと言うのである。

(高知県 山本 明司)

機関車の薪づくり

熊本県 南部 吉正

十年の強制労働刑を背負わされて、樺太からシベリアの労働刑務所に送られ、最初に働かされたのが蒸気機関車の薪づくりでした。当時シベリア鉄道の支線を走っていた汽車は、石炭ではなく薪をたいて動力源にしていたようでした。

建築資材として使用可能な材木は馬そりで運ばれ、

伐採現場に残っていたのは白樺や泥柳、その他曲がったトド松、エゾ松の類いでした。それらの樹々を一・五メートルの長さのにこぎり引きして、大きな丸太は真ん中から半分に割るのです。六百グラムの一日分の配給黒パンは朝一度に食い尽くすので、午前中はまだ下腹に力が入って斧を振りおろす力も残っているのですが、午後になると空腹感が募ってきて、斧を振り上げるのもやっとの状態です。的は外れ、思うようにノルマは上がりません。

一人当たりのノルマは、高さ二メートル、幅五メートルの薪をつくることでした。二人一組になっての作業ですから、当然その倍の作業を仕上げねばなりません。

私たちの作業班は、身体検査の結果三級労働者の烙印を押された、つまり軽労働向きの人たちでした。総勢三十人、その大半が満州から送られてきた日本人と中国人のグループでした。取り交わされる言葉もロシア語、中国語、日本語の入り混じったものであり、二人組の相手が中国人の場合、お互いの意志を確認する